

投稿「共に生きるということ ～10歳のモルモットが教えてくれたこと～」

武井 慶子

1 はじめに

10歳1か月のモルモット（雄）「MONちゃん」は、7歳まで学校の仲間と過ごし、8歳の誕生日に、「どうしても、あなたを迎えたい」という飼い主（2023年8月27日に第25回全国学校飼育動物研究大会で口頭発表させていただいた岡本雅乃）に譲渡されました。今年の猛暑を越え、10歳の誕生日を9月に迎えた矢先、10月1日、突然お別れの時がやってきました。10歳の健康診断でかかりつけの獣医師さんから「モルモットが10歳まで生きるとは本当に貴重なことです。でも、寿命を参考に考えると、モルモットが飼い主さんより長生きすることは難しいので、一日一日を大切に、最後の日が来ることを、どこかで覚悟しておいてくださいね。」というお言葉をいただいていた。命の火が消える瞬間まで彼（MONちゃん）は彼女に「生きる」ということを教えてくれました。そして彼女はしっかりとその瞬間まで彼を支えました。今回は「MONちゃん」と彼女の共に生きた日々から、彼女が何を学び、何を引き継いだのかをお伝えしたいと思います。

2 「MONちゃん」について

品種 クレストッド

性別 雄 年齢（享年）10歳1か月



写真1 MONちゃん

2020年コロナ感染拡大の中、奈良県立山辺高校にある奈良県立高等養護学校山辺分教室は新学期を迎えました。どんな学習がい

つからできるのか、試行錯誤の日々が続きました。山辺高校の小動物舎で飼育されている小動物の管理について当時農業科代表をされていた中井政治先生より相談を受けました。私は山辺分教室でインクルーシブ授業を担当していたこともあり、すでに愛玩動物飼養管理士の資格も取得していたため、まずは小動物舎の状態を把握することからはじめました。飼育環境にも課題があり、それから一つずつ向き合う日々が続きます。

あつという間に7月になり、生徒たちの登校も増え始めました。そんな中、分教室の生徒も小動物舎で授業を週に2時間させていただくようになり、7月初旬の授業で生徒たちから「先生、この子たちに名前がないけど、やっぱり名前、つけてあげたいよ。毎日お世話するときも、名前を呼んであげたいよ。」という声が出始めました。中井先生にお話したところ、「畜産では名前はつけないという声もあり、今まではつけませんでしたが、生徒さんの言うように名前がある方が良くかもしれません。」とのことで、2020年7月に初めて小動物舎のウサギとモルモットに名前をつけてあげることができました。それまで「モルモット1番」だった彼に「MONちゃん」と名前がついたのはそのときでした。



写真2 「モルモット1番」だった頃

当時の彼はウサギ用のケージで管理されており、臆病な彼はいつもビクビクしているようで、手足のツメが変形していました。ケージのトレーに足がはまり抜けなくなるこ

ともあり、獣医師さんに相談し、衣装ケースにおがくずを入れ管理することにしました。



写真3 「MONちゃん」になった彼(7歳)

当時、夏の暑さに衰弱し、命の危険もあった彼ですが、ケースでの生活で少しずつツメの変形もよくなり、動きやすさもあり、ゆっくり眠る姿も見られるようになりました。生徒たちが「MONちゃん」と呼ぶと反応してくれることが多くなりました。

3 彼女(飼い主)について

彼女は軽度知的障害をもつ26歳の女性です。

夏の全国学校飼育動物研究大会の口頭発表で自ら語ったように、幼稚園の頃から集団生活になじめず、母親がいないとどこにも「行かない」「行けない」というような状態でした。

学齢期になってもその状態は変わらず、支援学校の高等部でも保健室登校でした。卒業後も就労は難しく家で過ごす時間も長く、YouTube、SNSが情報の全てでした。ただ、18歳で私が指導しているダンスチームに入部し、その頃から他のメンバーとの繋がりもでき始め、21歳になり、週末のレッスンに独りで通えるようになり、23歳では舞台発表でも堂々と踊れるようになりました。23歳で初めてハローワークに仕事を探しに行き、介護施設に就労することができました。

コロナ感染拡大は彼女の職場にも大きな影響を及ぼしました。多くの衛生管理を必要とする現場では、その指示を瞬時に理解できる能力が必要とされましたが、学校で勉強をするという経験をほぼ持たずに生きてきた彼女には、理解できない言葉、指示が多くなりました。当時、彼女との会話の中に「私、職場で邪魔になっているかも・・・勤務時間が少なくなってる。

スタッフさんの指示を間違ってしまうことが多いねん。私に任せてもらえることがないねん。」など、自分の課題は明確になったけれど、それ以上に「できない自分」を感じるようになったようでした。自分の学力や人の役に立ちたいけれど、うまくいかないもどかしさを、初めて感じたのだと思います。

そんな頃、休日に私が小動物舎の管理をしていることを知った分教室卒業生が訪ねて来るが多くなり、彼女も母親と来るようになりました。初めは見学程度だったのですが、2回目には「お手伝いしたい」と言い出し、3回目からはバスに乗り独りで来るようになりました。特にモルモットが好きで、モルモットも彼女がケースに近づき名前を呼ぶと、「プイ、プイ」と反応することが多くなりました。「Kちゃん、すごいね。すぐに仲良くなれるね。丁寧なお世話ができるね。」と声をかけると、「私できてますか？仲良くなれてますか？」と心配そうに伝えてくれました。

それから3か月ほどして彼女から「先生、MONちゃんを私に飼わせてくれませんか？」という話がありました。

この時点での彼女の課題は、「日常の身辺自立」(自分で起きる、独りで移動する、外出時は自分で必要なものを準備する)、「日常生活」(食器洗い、洗濯物干しなどできることを増やす)でした。

この課題を抱えたまま、「モルモットを育てる」という課題を増やすわけにはいきません。また、「母親にお世話を頼んで好きな時だけお世話をする」など、絶対にさせることはできません。私はあえて、この課題を自覚し向き合うことを条件にした上で、温度管理や飼育の方法を彼女にも彼女の母親にも伝え、何回かMONちゃんに「お泊り」を経験させました。2か月後(MONちゃんの8歳のお誕生日)まで彼女の取り組みを見てから譲渡の許可をもらいました。

4 「MONちゃん」との日々

～毎日登校、実は、お出かけモル～

MONちゃんとの生活が始まった彼女ですが、しばらくは休日ごとにMONちゃんもバスに乗せて、小動物舎に通っていました。実はMONちゃんはこの頃から、学校へ週末お出かけモルになっていました。

お出かけモルになった理由は、MON ちゃん
のストレス軽減のためです。（彼は小動物舎
では一番の長老で、彼の存在は他のモルモ
ットにも大きな影響がありました。）急に仲間
と離れ、生活環境が変化することで MON ちゃんに
ストレスがかかることのないよう休日は仲間
との生活を優先したのです。

そんな矢先、彼女に転機が訪れました。MON
ちゃんとの生活が始まって半年後、「自分の
知らないことをしっかりと学びたい」という
思いから、山辺高校自立支援農業科を受験し
合格、現在 2 年生として毎日学業と農業クラ
ブの活動として小動物舎の管理に励んでい
ます。

「毎日学校に通う」ことは当然、家には誰
もいないことに。「私は MON ちゃんと一緒に
通う」そう決断した彼女。農業科の先生方も
「MON ちゃんはここの出身だから。」と、ご理
解いただき、どんな日も MON ちゃんと通学、
MON ちゃんは日中、仲間と過ごすことがで
きました。

彼女の大きな課題「登校」（朝起きて自分
と MON ちゃんの準備をしてバスに乗る）は、
休日は定着していたものの平日となるとハ
ードルは高く、「母親に起こしてもらおう」か
ら始まりましたが、MON ちゃんの準備だけは
自分で行うことができました。毎日毎日積み
重ねる「登校」、週に一度は起きることがで
きなくて遅刻しそうになり、まだまだ課題で
す。しかしながら、毎日、集団生活の中に自
分の身を置き、苦手な学習を身につけようと
励む姿は、誰にも想像できなかった姿です。
学習だけでなく、小動物の飼養管理にも毎日
16:00～19:20 まで農業クラブの活動として
取り組んでいます。この変化に MON ちゃんが
大きく関わっていることは言うまでもあり
ません。

5 「MON ちゃん」が居たからできたこと

8 月になり、毎日外気温が 30 度を超え始
めた頃から、MON ちゃんの体調に変化が見ら
れるようになりました。食べているのに体重
が毎日少しずつ減少し始めました。病院を受
診し、かかりつけの獣医師さんに相談すると、
「体に悪いところはありませんが、年齢から
考えると徐々に体力が落ちる可能性がある
ので、チモシーを主食にし、ペレット以外に
も栄養があり MON ちゃんが食べられるもの

を考えていきましょう」とのことでした。

彼女は「モルモットが食べられる栄養のあ
るもの」を調べました。チモシーも MON ちゃん
が好きな食べやすいものを探しました。



写真 4 MON ちゃんお家モルになる

9 月になり、MON ちゃんは 10 歳のお誕生日
を迎えることができました。この時、健康診
断として初めて血液検査をしていただきました
が、結果に問題はなくこのまま様子を見
ていくことになりました。ただ、冒頭にも記
したように獣医師さんから「モルモットが 10
歳まで生きることは本当に貴重なことです。
でも、寿命を参考に考えると、モルモットが
飼い主さんより長生きすることは難しいの
で、一日一日を大切に最後の日が来ることを
どこかで覚悟しておいてくださいね。」と
のお言葉通り、ゆっくりその日は近づいてい
ました。

9 月になるとペレットを残すことも多くな
りました。みんなが一緒なら食べられるかも
しれないと小動物舎でみんなと同じ時間に
ペレットをあげてみたり、ペレットもお湯で
ふやかして冷ましてからあげたりと試行錯誤
の日々が続きました。

9 月下旬になると気温も少し下がったため
か、体調を崩す前と同じくらいペレットをし
っかり食べてくれるようになりました。「こ
れで、しんどい時期を乗り越えられたのでは」
と安心したそんなときでした。お別れの日が
訪れました。

10 月 1 日、この日は日曜日で、休日は午
前 11 時 47 分のバスに乗り小動物舎に来る
彼女ですが、12 時にバスの中から私の携帯

に連絡があり「MON ちゃんの様子がおかしいです。足を動かしたいけれど動かせないみたいです。とにかく連れていきます。」とのこと。私が MON ちゃんに会った時には、動けない自分をどうしたらいいのか困惑しているように見えました。かかりつけの病院は休診でしたが、何とか連絡を取ることができ、彼女は連れていきたいと願い、私たちにも MON ちゃんが「このしんどさをどうにかしてほしい」と訴えているように思えたので、とにかく私の車に彼女と MON ちゃんを乗せて病院に向かいました。だんだん歯ぎしりが大きくなり、足が動かないだけでなく、体も動かし辛くなり、音も聞こえなくなっているように思える MON ちゃんを、彼女はしっかりと抱きしめ、声をかけ、励まし病院に到着しました。獣医師さんは最後の時が近づいていることを私たちに教えてくださり、少しでも緊張や痛みがとれるよう治療をしてくださいました。

小動物舎のみんなのところへ帰り始めたところ、MON ちゃんが彼女を探すかのように手を一生懸命伸ばし始めました。私は車を止めて、彼女と一緒に「MON ちゃん、ここにいるよ。山へかえるよ。大丈夫。」と、彼女も私も泣きながら彼の手を取り伝えました。それから間もなく、彼は息を引き取りました。彼女は自分の手の中で彼を看取りました。

彼女は MON ちゃんを飼うときに「私、MON ちゃんの最後の日まで必ずそばにいるから。MON ちゃんを最後まで飼うから。先生、約束するからね。」と言いました。そして彼を看取った彼女は「先生、MON ちゃんを最後まで飼うことができてよかった。MON ちゃんは私の心の中で生きているから、大丈夫。がんばれる。」と言ってくれました。これこそが、MON ちゃんが居たからできたことで「終生飼養」だと思いました。

飼い主が終生飼養することで MON ちゃんは、あの 600 グラム (最後の体重) の体で「命の限界まで生きる」こと (彼は人間の年齢でいうと 100 歳くらいです)、全身全霊で「生きる」ということを私たちに教えてくれました。

MON ちゃんが亡くなって一か月が過ぎた頃、彼女に尋ねてみると、MON ちゃんが居たから、

- ・学校に通うことができるようになった。
- ・勉強は大変だけれど、頑張れば理解できる

と思えるようになった。

- ・失敗してもやめようと思わなくなった。
- ・モルモットのことをもっとわかりたいと思った。
- ・モルモットの身体に良い食べ物、飼育方法を知りたいと思った。
- ・飼養管理士の資格が取りたいと思った。
- ・モルモットの飼育の仕方を知って、たくさんの人に伝えられるようになりたいと思った。
- ・命を大切にしたいと思った。
- ・命を守る人になりたいと思った。

とのことでした。

6 「MON ちゃん」と飼い主の共生

～お世話をしてもらおう立場からお世話をする立場へ～

彼女は MON ちゃんに出会うまでに、彼女のためにと母親が買ってくれたハムスターや保護犬と自宅で過ごしたことがありました。ですから動物と一緒に生活することは初めてではありません。しかしながら、MON ちゃんとの 2 年間の生活は彼女が自分でお世話をすると決めたものでした。「彼女が自分から何かをしたいと言いついても 2 か月も持続できないのではないか。」という思いと、「できれば、この MON ちゃんをお世話することで何かこの子が得られるものがあるのではないか。」という期待とが同時に生まれたのを覚えています。どんなことも母親に頼ってきた彼女が、「自立できるのだろうか」それは私だけでなく、ご家族も心配しておられました。

以前から、彼女には人や動物を思いやる気持ちは十分に感じられました。ただ何事においても「継続する力が弱く」、「すぐに諦めてしまい」、「どうせできないとなげだしてしまう」傾向がありました。「できないことは、全て母親に最後は任せてしまう」それが彼女でした。

しかしながら、今回は「私がお世話をしてあげないといけないの」と思えるようになったのです。もちろん MON ちゃんのお世話だけではありません。

- ・毎日、学校へ通う (MON ちゃんと一緒に)。
- ・毎日、勉強をする。
- ・毎日、小動物舎の管理を行う。

これらが約束です。

- ・小動物の管理をするために使うタオル類を洗濯し、乾いたらたたむ。
- ・お水や、餌用の器（陶器）を洗い、拭く。
- ・モルモットのケース（衣装ケース）を洗う。
- ・おがくずの交換をする。
- ・体調のチェックをする。（彼女はモルモットの担当）

これらは、ほぼ毎日、管理としてしなければならない作業です。

お世話をしてもらっている立場では、手を使って洗いや洗濯をすることも、重たい荷物を持つこともなかった彼女の手が、「お世話という仕事をする手」になりました。MONちゃんと共に生きていくために頑張った結果、1年経つ頃には、14Kgだった握力が21Kgになりました。また、お世話をしてもらっている立場では、何か変化があっても自分から連絡、報告、相談をする必要はなかったのですが、小動物の管理を担当する立場となれば、他者とのコミュニケーションはできなければなりません。メモを取りながら一生懸命、必要なことを伝えられるようになりました。

「ここまで続けてきたのに、どうしてしてないの？」というような甘えが出てしまうことも多い彼女です。いつも私はそういう時、彼女に「ここまで毎日やるからできるようになった力を、すごろくゲームのように、二つ進んで三つ下がるような残念な結果にしないでね。」と伝えます。すると、「もう一回頑張ってみるね」という返事が返ってきます。

これが学び直しを始めた彼女が、学校という場で出会った「MONちゃんという大切な命」から教えてもらった「お世話をする立場になる」という学びでした。

7 おわりに

私は分教室の教員として、山辺高校と分教室のインクルーシブ授業である「小動物の日常管理」に関り、2年間は分教室の農業の授業を「野菜」と「動物」とに分け週に2時間、担当してきました。私は「小動物の日常管理」という取り組みに「作業として取り組む」課題、「小動物を観察する」という課題、そして「命を学ぶ」という課題、最後に「共に生きる」という課題を設定し取り組みました。

「小動物の日常管理」をする中で成長していく子どもたちと関わってきた結果、多くのこ

とが見えてきました。

「作業として取り組む課題」では、生き物の生活空間であるケージやケース内を衛生面に気をつけて掃除をする、掃除に使ったタオルなどの洗濯や主食となるチモシーや水の補充をすることなどを課題にしました。この課題に取り組む中で、生徒たちは、今まで経験したことがない洗いや洗濯を経験し、家庭でもそのことを自ら家族に話すようになり、自信をもってお手伝いという形で、各家庭で実践するようになりました。また、作業内容は同じでも、どの作業から取り組むのか、誰がどの作業を担当するのかなど話し合い、作業工程を決め、確認した後に取り組むようにしたことで、自分たちで考え行動することができ、指示を待つのではなく、自分が何に取り組んだのかを報告できるようになりました。

また、「小動物を観察する」「命を学ぶ」という課題では、自分の食事や体のことなどに関心を持つことがなかった生徒たちが、ウサギやモルモットの歯が不正咬合になり、その後何も食べられなくなった姿を見て「ウサギやモルモットの歯は、伸び続けるからしっかりチモシーを食べさせてあげよう」といいチモシーの準備をし、各個体がしっかりチモシーを食べられているのか観察し始めました。この後、歯磨きが定着しなかった生徒が歯を磨くようになり、自分が歯を磨くようになった話をお気に入りのウサギやモルモットに「僕も何でも食べられるように頑張ってるよ」、「歯も磨いてるよ」と語りかけていました。また、爪を切るのが怖くて仕方がない生徒が、ウサギやモルモットは爪切りをしてあげないと折れて、大変な怪我をしてしまうことを知ってから、自分から母親にその話を伝えて、「僕、爪切り頑張るから教えて」と伝えるなど、「共に生きる」中で多くのことを学びあい、成長してきました。卒業した後も「先生、ウサギやモルモットたちに会いに行ってもいい？」と休日に訪れ、日常管理を手伝ってくれながら、ウサギやモルモットとふれあい、毎日頑張って働いている自分の近況を話してくれます。

そして「先生、大好きな〇〇ちゃん、僕が会えなくなっても覚えてくれてるんやなあ。名前呼んで撫でてあげたら、前みたいにペロペロ手をなめてくれるねん。これで、頑張れ

るわ、また来てもいい？」と話してくれました。このように、「お世話してもらおう」立場だった彼らは、小動物の日常管理を経験することで「お世話する立場」に成長したのです。

私は、動物が人間を成長させてくれる場面を数々見てきました。今回の MON ちゃんと彼女の例も含め、動物と学校の生活の中で毎日関り、共に成長する機会が持てたことは、確実に「生きる力」に結びついています。

私は、発達障害のある子どもたちだけでなく誰にとっても、継続をすることは力となり、小さなこと、基本的なことの繰り返し、これが本当に成長に繋がり、「生活力」、「社会性」、「労働の基礎」へと発展していくのではないかと考えます。そしてまた、命ある動物と関わることで、「共生」することで、大切にしていかなければならない「思いやり」の精神を育てることができるのではないかと考えます。

今回は MON ちゃんを看取るという本当に貴重な経験を通し、「生きる」ということについて学びました。私はこれからも、共生し、成長していく彼女、彼らの姿を見守ると共に、動物たちとの関係について、学んでいきたいと思ひます。

私が小動物たちと一生懸命向き合うことができたのは、これまで共に小動物舎で過ごしてきた小動物や生徒たち、そして支えてくださる先生方や獣医師の先生方、保護者のみなさんが居たからです。そしてそんな毎日の飼育の様子を奈良まで見に来てくださり、励まし続けてくださる学校飼育動物研究会の皆さまが居てくださったからです。学校飼育動物を守るためには本当に多くを学ばなければならないこと、多くの方々からご意見をいただき、受け止め、繋がらなければならないことを学ばせていただきました。私はまだまだ学び始めたばかりですが、障害のある子どもたちと学校飼育動物との関係について、これからも学んでいきたいと思ひます。

今回はこのような機会をいただき、誠にありがとうございます。これからもどうぞ宜し

くお願い致します。

【追記】

MON ちゃんが亡くなって、それは2回目の月命日12月1日のことでした。

MON ちゃんを飼い始めた頃から、「私も、先生みたいに愛玩動物飼養管理士の資格を取得したい」とお母さんと一緒に勉強しはじめた雅乃さんですが、残念なことに1回目の受験は不合格でした。その後、登校はできたものの MON ちゃんを思い出しては泣き続けていた彼女。私が「試験受けないの？MON ちゃんなら何て言うかなあ」と話しかけると、しばらくして「MON ちゃんはネネがんばれ！って言う。応援してくれてるから、やっぱり頑張って勉強する」とのこと。彼女は MON ちゃんに励まされ11月に母親と一緒に2回目の受験。

MON ちゃんの2回目の月命日である12月1日に「奇跡が起きました」と私に連絡がありました。なんと二人とも見事に愛玩動物飼養管理士の合格通知を手にしたのです。

MON ちゃんの励ましは最強です。彼女はこれからも MON ちゃんに励ましてもらいながらいくつものハードルを乗り越えて行くことと思ひます。

(奈良県立高等養護学校)

参考文献等

- ・「主体的に学ぶ発達と教育の心理学」 高村和代 安藤史高 小平英志 編 ナカニシヤ出版 (2022)
- ・「動物飼育と教育」第24号 (2020)
- ・「ベーシック発達心理学」開 一夫 斎藤慈子 編 東京大学出版会 (2018)
- ・「発達心理学」 藤村宣之 編著 ミネルヴァ書房 (2017)
- ・「思いやり行動の発達心理」 菊池章夫 二宮克己 共訳 金子書房 (1993)
- ・「いま、国語にできること 生きる力を考える」 森島久雄 玉川大学出版部 (2007)